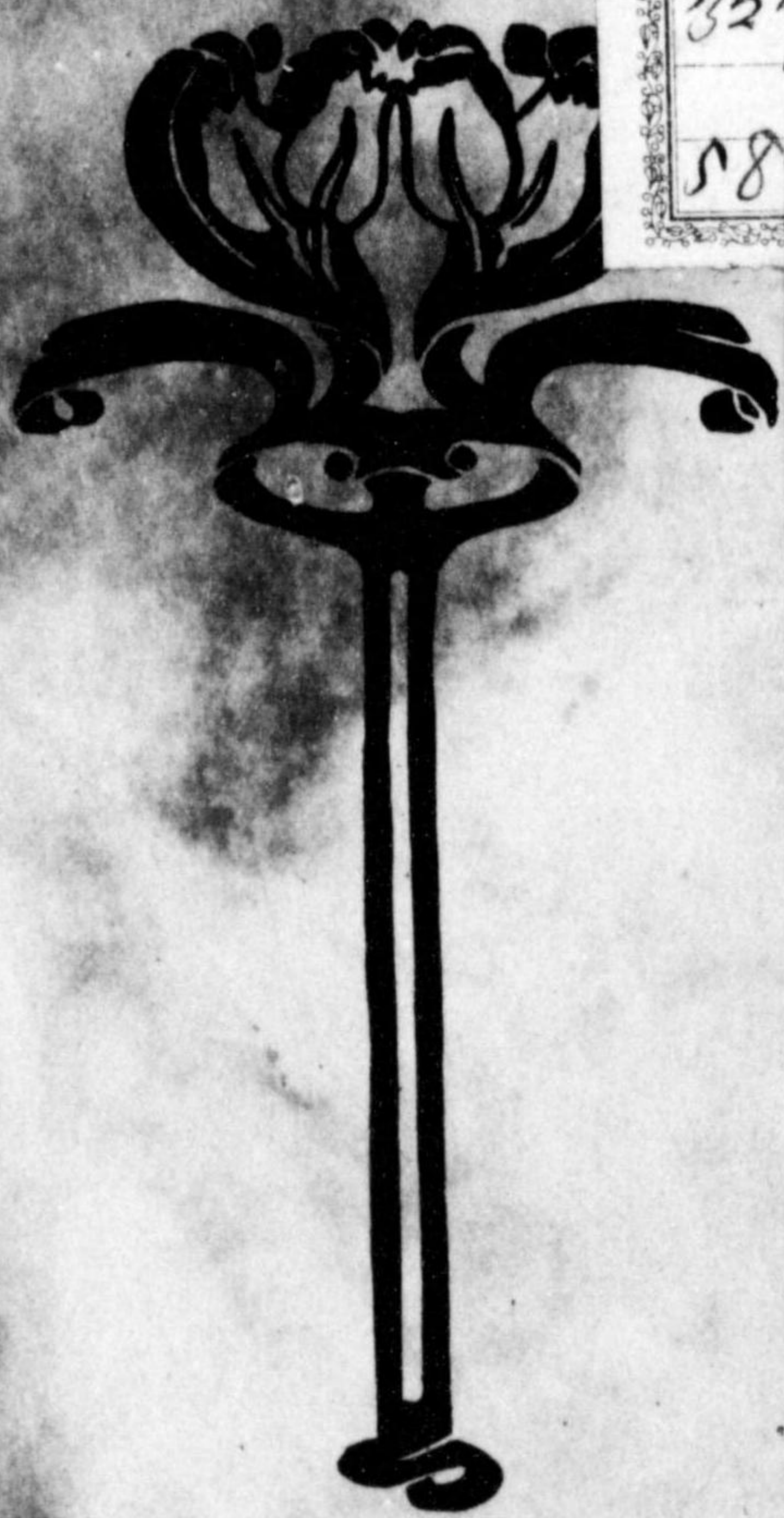


324
585

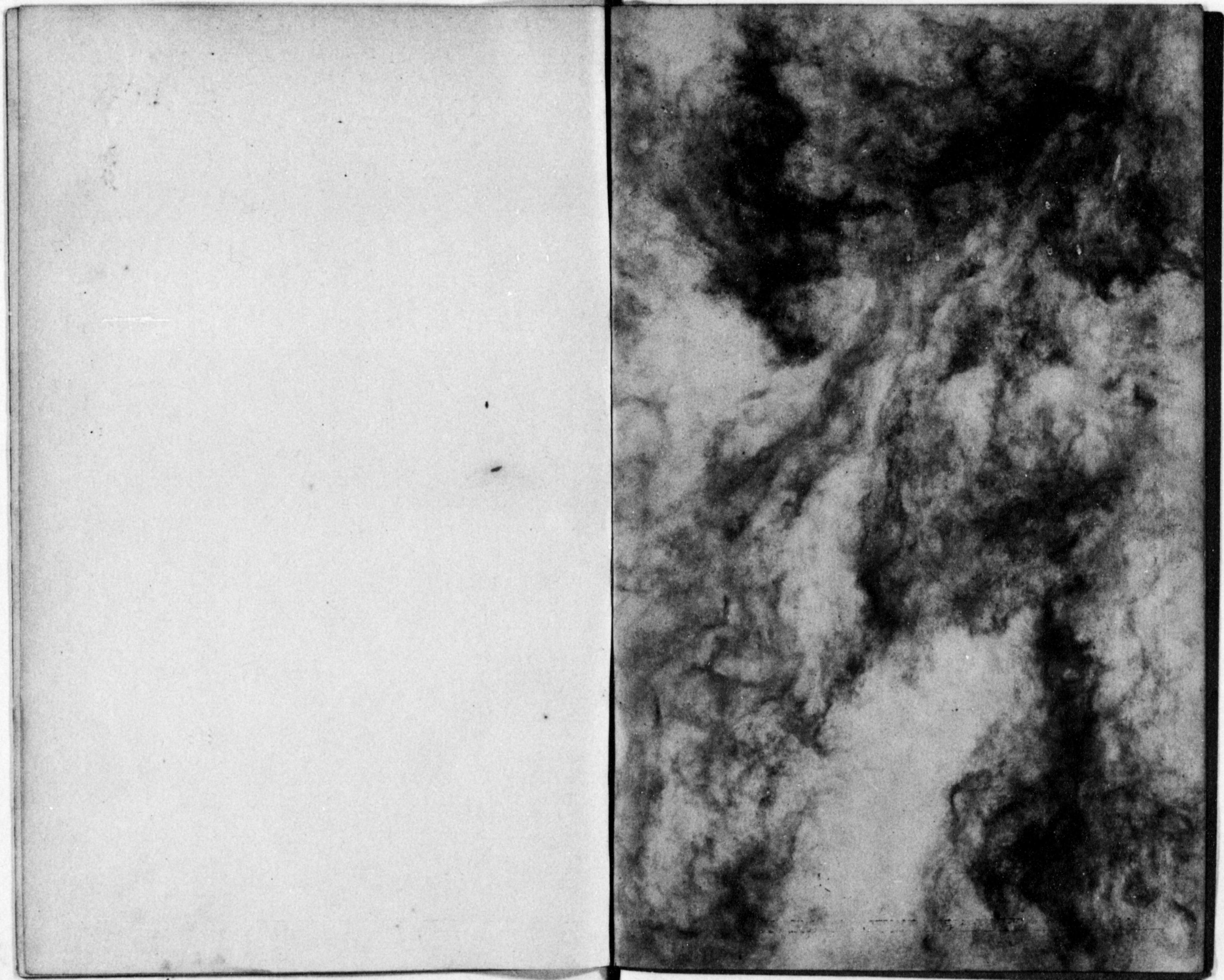


人生の最後

佐伯剛平著



版蔵館文博





佐伯剛平著

人生の最後

東京博文館出版

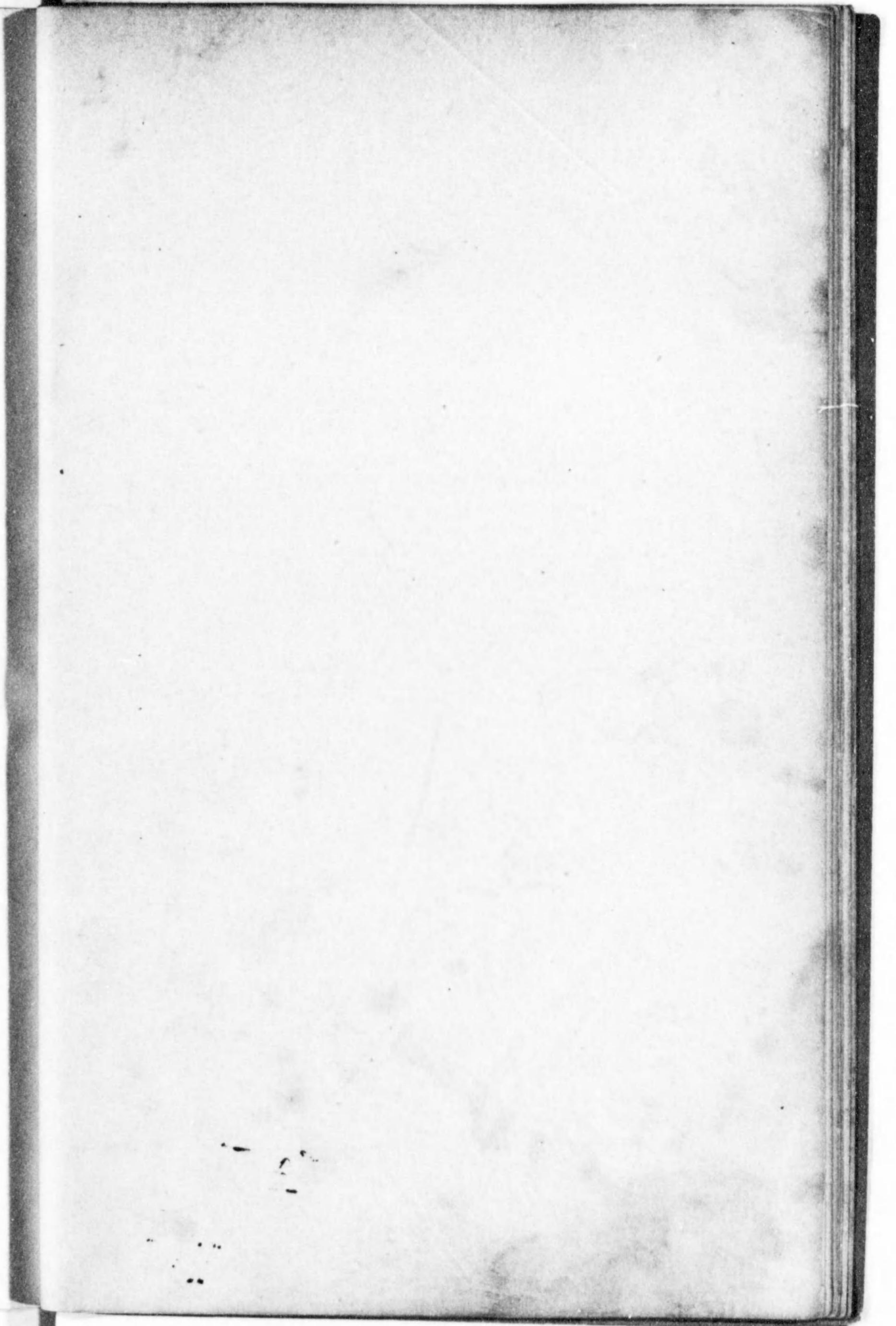
明治
44.11.10
内交

著者小傳

著者は岡山縣の人。明治初年東京に出て、明治大學の前身なる講法學會に於て法律學を修め、後代言人となれり。十二三年頃末廣鐵馬場辰猪、大石正巳、犬養毅の諸氏と共に、盛んに自由民權の説を唱へて東西に奔走せり。二十一年頃故後藤伯の大同團結の前身火曜會の幹事たりき。後信州松本にありしが、三十三年若松市に移り辯護士を開業し居たり。昨年九月頃より胃痛に罹り、既に死期の迫れるを知り、「人生の最後の著を思ひ立てり。遂に十月十五日夜東京駿河臺の病院に於て、友人等と談笑の間、從容として永眠せり。享年六十歳。



著者佐伯剛平氏の肖像





病床に於ける著者

1

人生の最後目次

一 人生の意味……………一

- イ 常識より観たる宇宙
- ロ 唯心論的立脚地
- ハ 唯物論的立脚地
- ニ 厭世と樂天
- ホ 常識と人生

二 人生と社會……………二七

- イ 社會の進歩
- ロ 道德の變遷
- ハ 個人の社會に於ける意味

三 人生の義務……………四一

イ 義務の觀念

ロ 社會

ハ 人生の義務と社會の活動

四 自殺論……………五五

イ 自殺は社會に免るべからざる現象なること

ロ 自殺は社會の狀態に伴ふこと

ハ 自殺は反動的現象なること

ニ 自殺の愚なること

ホ 是認すべき自殺

五 活動の終焉と自葬……………七五

イ 生命と眞理

ロ 神的靈的生活に達する手段

ハ 決心の修養

ニ 自葬

ホ 葬式の改良

○

評 論……………遠藤隆吉……………一〇四

目次終

人生の最後

佐伯剛平著

一 人生の意味

イ 常識より観たる宇宙

今日此の世界に生活して居つて、眼を開いて宇宙森羅萬象を観察するときには種々様々殆ど名状すべからざるものである。植物にしても只に一本の樹かと思ふといふと、之を細かに分析して見れば如何に微細の部分に於ても尙變化がある。顕微鏡の下に照らして

不可思議なる宇宙

全體を知
ることはい
出來ない

二
之を見るときには益々其の變化の夥しきに驚くであ
らう。更に廣く其の種類を世界に亘つて求めるとき
には、植物學と雖も到底盡すことが出來ない位である。
萬物は皆此の如くて、澤山の種類が存在して居るので
あるが、逆も吾人の限りある生命を以て之を見盡すと
云ふことは出來ない。唯自己の周圍のものを見て居
るに過ぎない。之を時間空間の上より述べて見れば、
地球乃至世界はいつの時代に始まつたのであるか、又
いつの時代に終るのであるか、殆ど測り知ることはい
來ない。又天の上に天あるか、地の下に地あるか、是れ
亦殆ど想像することが出來ない。若し限りがないと

限らない
の意味

したならば、その限りのないと云ふ意味は如何なる意
味であるか。此の如く吾々が目で見て心で想像する
所に於ても眞に不可思議なる所のものが存在して居
るであらう。通常の人間は斯かる不可思議なる所ま
では考へないで、單にお互の間即ち比較相對の範圍に
於て種々の現象を觀察して居るからして、極めて卑近
な單純な事柄を以て其の腦髓を充たして居るのであ
る。而して此の單純なる事柄が直に宇宙其の儘であ
るかといふと、さうでない。是れは謂はゞ時間に於て
も空間に於ても宇宙の一小部分に過ぎないのである。
是に於てか學者は無限とは何であるかと云ふことを

有限と無

考へて來るのである。何故に無限といふ考を起して來るか。有限があるからして無限があるのである。有限が考へられる以上は、其反對の無限も亦考へられなければならぬ。又無限といふと之を経験することが出來ない迄のことであると斯う云ふのが普通學者の議論である。地球は無限であつて經驗することが出來ないからして何となく心に不安を感じて居るのであるけれども、無限と云へば其れで十分意味は分つて居るのである。縦令左様であつたにした所が、まだ人間の量見には何となく満足出來ない。經驗の出來ない所であるから満足が出來ない。又少なくとも日

四

常識と宇宙

常の經驗に類したものが無いから、どうしても満足することが出來ないのである。されば常識より觀たるところの宇宙は、まのあたり甚だ淡泊なるもの、やうであるけれども、更に他の一方面に於ては實に不可思議なる所のものと謂はなければならぬ。

口 唯心論的立脚地

斯く宇宙を觀察するに當つて、少し考へた人は斯様に曰ふて來る。この宇宙は無限のものか有限のものか分らない。先づ無限らしく思はれるけれども、全體之を無限といふのは何であるか。つまり自分の心であらう。宇宙を觀るのに自分の心を以て觀たのであ

無限と心

五

宇宙は心
に映つた
姿

る。ショーペンハウエルが云ふた様に、心を交へずして宇宙を観るといふことは出来ない。即ちどうしても唯心論の立脚地に立たなければならぬことになつて来る。唯心論といふとむづかしいやうであるけれども、其の實は何もむづかしいことではないので、即ち何物を観ても自分の心で観るのであるから、心がなかつたならば其の物はどうであるか分らない。心で観たものが只斯様に在るに過ぎないのである。是れが先づ唯心論的の見方である。けれども心で観るといふ時の心と謂ふのは果して何か。普通に言ふ心は即ち物に對して心と謂つたので、其の心は物に對するの心

一種の淺
薄なる認
識論

であるからして、前の心で観ると謂ふ時の心ではない。かう謂ふ時の心は果して如何なるものであるか。此處が先づ哲學の要點であらうと思はれる。よく認識論などを云ふ人が斯う云ふことを曰ふ。即ち向ふに物躰があるにしたところで、其の物躰は空氣を通じ又眼を通じて脳髓に映るのであるからして、本當のとは分らないと。成程それは本當のとは分らないに違ひはないけれども、是れは哲學論としては面白くない。なぜかと云へば、眼といひ空氣といふ物があると云ふことを云ふのが既にをかしい。即ち向ふに物があつて、其の物が映るといふならば眼や空氣といふ物が已

外物と言
へば心が
ある

八
に心とは別に存在して居る譯である。其故に眼や空
氣だけを客觀物とするのは議論が粗雑なものと謂は
なければならぬ。是れと丁度同じで、外物は心がなけ
れば分らないと云ふけれども、心といふ以上は最早物
に對して居るものである。して見れば斯く云ふ人の
腦髓に於ては心と物と相對照させて居るのであるけ
れども、其の相對照させる所のものは何であるか、又對
照させる時の瞬間の働きは何であるか。是に於てか
眞の意味が現はれて来る譯である。此の點になると
いふと、之を唯心論的立脚地といふて宜いか、或は他の
言葉を用ふべきか、大に疑はしくなつて来る。

物と心と
を對せし
める作用

九
若し之を唯心論的立脚地と云ふ時には心に關係を
して来るからして、どうしても物と相對する傾きがあ
る。今のは物と對するのではなくして物と心と對せ
しむる所の作用であるからして、物心二者を超越して
居るかといふと、必しもさうとも云へない。何故かと
云へば、物心二者を超越して居るものであつたならば
考へるとが出来ないのであるからして、心と物とを對
照せしむると云ふ考が確に一つの考である以上、之を
以て超越したものと云ふことは出来ない。然らば純
然精神界のものかと云ふと亦必しもさうでない。精
神界のものであるとすれば、其の心の作用は物と相對

して来る。是故に物心二元を超越したと云ふやうなものでもなく、又物心二元を超越しないと云ふものでもない、一種特別なる作用と謂ふべきであらうと思ふ。然れ共、どうしても人の心の中で考へて居るとより外思はれないからして、やはり其人の精神に於て物心二元を超越しやうとして居るか、若くは物心二元以外に立つて物心二元の關係を求めやうとして居るより外ないからして、此處より見れば或は物心論的立脚地と云ふても宜いかも知れぬ。只唯心論的立脚地と云ふと、精神と物體と相對せしめて、此の心があつて初めて外物が斯く見ゆるのだと云ふことになり易くなつ

て、是れでは今云ふた認識論の議論として寔に淺薄なことになるから、唯心の上に先天の二字を附けて先天唯心論的立脚地と云ふ方が宜いやうに思はれる。換言すれば、心でもなく物でもない一種の作用があつて、初めて物と心と相對せしむることが出来るのであると、斯様に見るべきであるけれども、それでも兎に角外から見れば其の人が考へて居るのであるから唯心といふことは免れないであらうと思ふ。即ち宇宙を觀察するには、どうしても唯心論的立脚地の上に陥らざるを得ないのである。畢竟人間が考へた所で如何様にもなるのである。佛教で一切萬法皆空と云ふけ

れども、是れもやはり人間の考へた所でさうなるだけのことである。哲學者が出て、宇宙は何のかんのと種々の議論をするけれども、哲學者の見様が變化するだけのことである。して見れば今日宇宙を觀察するに當つても單に此の如き立脚地に立つのが必要であらうと思はれる。

ハ 唯物論的立脚地

唯物論的立脚地と云ふは、凡ての萬物が皆物質である、精神は物質の一つの働きであると云ふに過ぎないのである。けれども此の論は到底成立しないと云ふことは明かである。なぜかと云へば、精神と物質とい

精神は物
質の作用

ふものとは全く異なつたものである。物質は空間の中に在るものであるけれ共、精神は空間の中にはない。空間の中にないところのものが、どうして空間の中に在るものより生ずるか。到底解釋することは出來ないのである。生理學者が、精神は腦髓の作用だと云ふ。胃囊が食物を消化し、心臓が血液を清潔にすると同じ様に、腦髓は考へるといふ一種の働きを爲すものであると云ふけれども、思想其者は化學上の作用とは別なもので、全く無形なものである。腦髓の作用といふものは有形の方面に於ては、單細胞の分裂とか、或は結合とか云ふことに過ぎないので、無形の精神其者は外か

ら見て知ることとは出来ないのである。されば精神が
 脳髓の働きたと云ふ議論は、是れは哲學上全く價値の
 ないものである。

精神存在
の場所

一體精神が何處に在るかといふ質問は、これは質問
 にならないのである。精神は脳髓の中に在ると云ふ
 のであつたならば、脳髓の何れの部分に存在して居る
 か。脳髓の褶襞の中に在りと云ふて見た所で、其の何
 處の邊に在るか。若し是れが物質であるならば捉ま
 へることが出来るものである。縦へ物質でないにし
 ても、何處に在るといふ場處を示せば必ず捉へること
 が出来るけれども、それは場處を示すことが出来ない

精神が脳
髓に集中
する

て、只今日學問上の知識に於て斯の如く云ふに過ぎな
 いのである。即ち下等動物から人間に進化するに隨
 つて段々高尚になつて来る、其れと同時に脳髓が大き
 くなつて来ると云ふ所からして精神が脳髓に集中し
 て居るといふだけのことである。學問上の知識に於
 ては精神は脳髓の作用とするけれども、自分自身に考
 へて見るときには精神は何處に在るか分らない。昔
 の人は却て精神は人間の心臓に在りと云ふた者もあ
 り、或は又其他の部分に在りと云ふた者もある位であ
 つて、精神の場處を云ふことが出来ない。此の如き譯
 であるからして、唯物論といふて、宇宙には唯物が在る

のみだと云ふ議論は殆ど信憑すべからざるものである。是れよりは唯心論の立脚地、殊に今述べたところの先天唯心論の立脚地こそ眞に取るべきものに近い。

二 厭世と樂天

是迄歐羅巴に生れ出でたる哲學者の數、或は又支那印度に生れ出でたる哲人賢人の數は非常に多いことであつて、其等の人々が何れも自分一個の意見を出して居るけれ共、逆も統一することは出来ない。又逆も是れが凡ての人を満足せしむると云ふことは出来ないのである。して見れば哲學上の議論は果して價値があるかどうか、大に疑ふべきものである。哲學其者

哲學論の
價値

厭世と世
界觀

が人間に取つて効力のあると云ふことは言ふ迄もないけれども、一人の哲學者の意見が果して價値あるものであるか、どうかと云ふことは疑はしい。唯心論唯物論といふても逆も議論の決着の仕様はない。けれども、何人と雖も厭世樂天の如き考を抱かない者はない。是れは矢張り一種の世界觀であつて、即ち其人の宇宙に對する考である。或は之を以て厭世即ち最も悪いものと觀察するか、或は之を以て樂天即ち最も善きものと觀察するか、宇宙に對する觀察である。青年男女が悲觀して、所謂厭世觀を抱いたと云ふのは、つまり自分の精神状態の上より宇宙を最悪なるものと看

世界觀は
主觀的の
ものに過
ぎず

做したのであつて、所謂一種の宇宙に對する觀察である。或は又精神病患者が快樂病に罹つて、何を見ても愉快だといふのも、やはり一種の宇宙觀である。つまり其人の精神状態に依つて或は樂天觀或は厭世觀が起つて來るのである。故に厭世といひ樂天といふた所で、つまり主觀的の状態であるのである。

是れと同じく、哲學者が持つて居るところの厭世觀樂天觀にした所で矢張り其人の考である。其人の精神状態に依つて或は厭世とも感ぜられ或は樂天とも感ぜられる。青年男女の世界觀が主觀的であるのみならず、哲學者の世界觀も矢張り主觀的であつて、其人

二元論一
元論

哲學と性
格

がさう思ふに過ぎない。これは此の如き事に於てのみさうであるのではないので、二元論とか一元論とか、或は唯心論とか或は唯物論とか云つた所で、やはり其人の精神状態に因るのであつて、他の人が考へたならばどうか分らない。哲學と人の性格といふものとは餘程密接なる關係を有つて居るものである。一元論を作る人は其人の性格が適して居るのである。二元論を作る人も矢張り其人の性格が適して居るのである。性格に適當した哲學を作るのであるからして、要するに哲學といふものは其人に特有な、又其人の性格に適ふやうなものであつて、他の人から觀るといふと

必しも満足すべきものではないのである。

然れ共彼の青年男女が厭世樂天の考を抱く所に依つても明かであるやうに、凡ての人が皆この世界觀人生觀を有せざるを得ないのである。又此の考を持つて居れば餘程愉快に違ひない。宇宙は如何なるものであるか、人生は如何なるものであるかと云ふ事に對する根本の考を持つて居るといふと、何事を爲すにも非常に愉快を感じて來るものである。哲學の實踐的の價値は此處に存して居る。例へば世上の萬事は朝露の如きものであると云ふのは一種の世界觀人生觀である。此の世界觀人生觀を楯に取つて十分能く之

哲學の實踐的價値

文盲者の世界觀

を心に守つて居るときには、凡ての事が朝露の如くに觀察せられるからして、それだけ心に於て心配することもない。又それだけ心に於て喜ぶと云ふこともない譯である。是故に簡單なる朝露の如しと云ふ一つの句であつても、深く之を解釋する時には非常に値打ある事となるのである。深く之を心に留めなければ全く値打はないのである。田舎に行いて見るといふと、目に一丁字のない無學の百姓であつても尙且つ娑婆の世の中はこんなものであるとか、あんなものであるとか云ふて、一種の人生觀を持つて之を以て満足して居る者がある。逆境に處したる婦人などにしても

學 逆境と哲

矢張り同じこととて、何か其處に一種の人生觀を抱いて是れで満足して居る者もある。此の如き考は多くは逆境に處したる人に依つて出來得べきである。逆境に處したる人は精神を苦ませることが非常であるからして自から宇宙に對する考が出來るものと見える。始終順境にばかり處して居る者は勢い此の如き思想を作る時がないのである。富豪の間に哲學の起つたと云ふことは聞かない。これは彼等が心を傷めないからである。心を傷めることに因つて哲學は起り、考も出て來る譯であるからして、多くの場合に於ては逆境に處したる者の中に哲學は起り來るものであると

困難な時
に精神を
失はない

云ふことは大に注意すべき點であらうと思ふ。是れから見ても哲學は實踐的の價值あるものである。逆境に處するのは困難なる場合であるからして、其の困難なる場合に當つて人間は精神を失はないやうにすれば宜いのである。樂な場合に當つては多くは精神を失はないけれども、困難なる場合に當つて精神を失はないと云ふ者は少ないからして、是非共是れに處するだけの人生觀宇宙觀を持つて居らなければならぬ。即ち人生觀宇宙觀は實踐的の價值のあるもので、何人も出來得べくんば之を有する方が宜いであらうと思はれる。

ホ 常識と人生

五六尺の
身體

人間は僅に七八十年の生命を有つに過ぎない。僅に五六尺の身體を維持するに過ぎない。時間空間の上から觀れば宇宙の無限大なるに比して無限小と謂ふべきである。如何に頼山陽の様に、身は一室の中に偃臥して心は千載の得失に關すと云ふて見た所で、身軀生命等は誠に小さいもので、唯その心だけは勝手に物を考へるのであるからして、宇宙の事も考へる、古今の事も考へることが出来る。此の點に於て心と云ふものが洵に意味の深いものとなるのである。そこで此の心を土臺として作つたところの哲學が大に價値

心の意味
は深大な
り時間空間
と心

あるものと看做されて、其の高尙なるものに至つては殆ど多くの人を驚絶せしむると云ふやうな状態になつて來るのである。何人と雖もやはり厭世觀なり樂天觀なり兎に角一種の人生觀宇宙觀を抱いて此世に處することに依つて以て満足して居るものである。即ち時間空間の上より觀れば小さい所の人間も、其の心に於て宇宙觀人生觀を抱くことが出來て、是れに依つて初めて満足しつゝあるのである。

人間なる動物は、地球の表面に現れて來ていつ死ぬるか分らない。七八十年の生命と云ふて見た所でもつと早く死ぬ者もある。突然の出來事に依つて何時

人生測ら
れず

死ぬかも知れぬ。未來は希望を有すると同時に又全く x なる範圍である。同じくこの不安なる世の中を渡るには、其の心に於て宇宙觀若くは人生觀といふ一種の健全なる汽船を得る方が安全に感ぜられ一時の氣休めにもなることであらうと思ふ。哲學は謂はゞ氣休めの様なものであるからして各人皆之を勉強す可きである。

二 人生と社會

イ 社會の進歩

人間は社會の中に生活して居る。どんな人間でも社會を離れて生活すると云ふことは出来ない。ロビンソン、クルソーは定めし不愉快なことであつたらうと思はれる。又如何なる仙人でも社會を離れると云ふことは萬が一にも出来ない譯である。彼等は社會を離れて居ると云ふけれども、其の實は矢張り誰かしら相手が欲しいのである。相手なくして純粹の獨りて生活することの出来るといふ人間は恐らく無い。

社會を好むは人の性

であらうと思ふ。言語の能力があり、思想交換の情欲を持つて居るものであるからして何等か相手が欲しに違いない。純粹なる獨居生活といふ事は到底堪へ忍ぶことが出来ない譯である。みな社會の中に生活して居つてお互に便利を圖つて居る。便利と云ふことは悪いことではない。社會の進歩はつまり便利を圖る所から起つて來るのである。莊子の中に便利を悪いことと謗つた例がある。文明國に於ては行ふべからざることであつて一般の人情でない。誰でも便利を好み、勞少なくして功の多からんことを望むと云ふことは言ふ迄もないことであつて、是れが亦凡て

文明人は便利を好む

社會を好むは人の性

勞少くして効多きを好む

の人の性情に適つて居る譯である。便利を好むからして、世の中の發達も起つて來る。交通機關も便利を希望する所から起つて來るのである。複雑な機械を造ると云ふのも亦便利を希望する所から起つて來るのである。便利といふのは只簡單といふのではなくして、つまり人間に適する様な、勞力を少なくせしむる様なそれで功を多くせしむる様なことを指して便利といふのであるからして、世の中が段々と此の方面に傾いて來ると云ふことは言ふ迄もないことである。各個人は、其の社會に生活して居るといふと、不知不識の間に他人の作つた利益を被むることになる、さう

同國人も文明の利澤を蒙るは、蒙る程度は異なる。

三十
して社會との關係も密接になつて來る譯である。社會の人は何れも皆一樣に文明の利澤を被むるかといふと、さうでない。同じく英吉利の内に生活して居ても、寒村僻地の人間は日本人ほど汽車や汽船を利用したことの無い者がある。乃至は電話を使つたことのない者もある。日本人程どころではない。支那人でも朝鮮人でも富裕な人間ならば種々の便利をして居るけれども、是れにすら劣つた者が多いのである。此等は例外であつて、どのみち其の社會の文明が發達するに従つて一般に利澤を被むる事になつて來る譯である。果して然りとすれば、吾々今日の精神は社會か

精神は社會の產物

ら作られたものであつて、即ち社會の產物と謂ふべきである。明治の時代に生れて來れば、どうしても明治時代の人間である。封建時代に生れて來れば、どうしても封建時代の人間である。其の時代に適した者が出來て來る譯である。此の如く考へて見るといふと、人生と云ふて見た所で洵に果敢ないもので、其の社會のまにまに變動するものと謂ふべきである。

口 道德の變遷

吾輩が日常遵用して居るところの道德にしても、やはり始終變遷して居る。忠孝の二字は古往今來少しも變りがないかと云ふと、さうでない。昔の忠と今の

昔の忠孝と今の忠

忠とは或點に於ては大に違つて居る。昔の孝と今の孝とも亦或點に於ては大に違つて居る。何故かと云へば皇室に對して眞心を盡すといふ點は昔も今も變りはない、忠の定義は變りはないけれ共、其の社會の有様から考へて見たならば非常な違いがある。即ち古代の社會に於ては、皇室に對する忠といふ考が一般にはなかつた。崇神天皇の時に叛者四方に起ると書いてある位で、餘程忠といふ觀念の薄かつたと云ふことが分る。社會から云へば則ち社會的の勢力がないものである。この勢力のないものが遂に今日の如く誰一人皇室に對して惡事を企てる者もなくなつて來た

と云ふのは、忠の社會に於ける勢力が非常に違つて來たといふことを證明するものである。孝に就いては古來斯の如き違ひも見えないやうであるけれども、是れとても全く變らないと云ふことはない。今日は孝といふ觀念も幾らか薄らいて來たと云ふて宜いかも知れぬ。忠孝といふことを非常に獎勵する所を見るといふと即ち薄らいて來たと云ふより外ない。父母の寫眞を寄宿舎に懸けて毎日之を拜ませるといふ所を見るといふと、昔より忠孝の觀念が衰へて來たと云ふより外ないのである。さうでなければ其程迄に云はぬでも、親といふものは自然の情で子として之を尊

寄宿舎に
父母の寫
眞を掛け
る

君の御馬
前といふ
とは今日
にはない

ばぬ者は殆ど無いと云ふても宜い位であるからして、
斯く迄しないで宜い譯であるけれども、殊更に父母
の寫眞を寄宿舎に懸けると云ふことを或會ては決議
したといふ位である。是を以て見るといふと、少なく
とも彼等の中には一時孝といふ觀念が薄らいて來た
と見るより外ないと思ふ。道德は其の種類も様々あ
つて、或者は新たに發生して來るし、又或者は消滅した
り變遷したりして居る。公德の如きは近頃發達した
ものである。君の御馬前に死ぬといふことは今日は
ない。今日は如何に親しい間柄であつても、自分の命
まで捨てるといふことは餘程の場合でなければない

官省のた
めに命を
捨てない

譯である。上皇室に對する場合を除くの外自分の命
を捨てること云ふことは殆ど有り得ないことである。
昔の武士は祿を貰つて居るが爲に君の御馬前に死ぬ
といふ習慣であつたけれども、今日は祿の爲に命を捨
てる杯といふことは考へられない。官吏が、若し其の
縣廳が滅びるからと云ふて縣廳と一緒に命を捨てる
と云ふことはない。諸官省の官吏にしても矢張り同
じて、其の官省が潰れるからと云ふて之を枕にして命
を捨てるといふことはない。唯皇室の危難といふこ
とに當つて命を捨てるのは是れは當然のことである。
君の御馬前といふ考も段々なくなつて來たと云ふこ

とは極めて明かなことである。之を以て見ても道德に變遷があると云ふことは分る。

此の如く道德に變遷があるのであるからして、吾々が今日如何なる道德に従つて實行するかと云ふと、其の時代の道德に従ふより外ないのである。昔の人が惡として居つたことであつても、今日は必しも惡としないことがある。昔の人が善として居つたことでも今日は必しも善としないことがある。酒の献酬の禮などは昔の人は善いこととして居つたけれ共、今日では實は是れは惡いこととして看做して行はれない様を譯である。或は昔は自分の物を賞めて人に遣るといふ

昔の惡も
必ずしも
今の惡に
あらず

贈答に於
ける古今
の差

ことは宜しくないことのように云ふて居つたけれども、今日ではさうでないので、自分の物は之を賞めて人に遣る方が宜いとして居る。これは道德といへば道德のやうなもので、極く些細なことであるけれども、つまり人情の同じからざることを示すに足りる。それで道德が此の如く變遷するものとするといふと、吾々の社會に處して行ふところの行といふものも洵に果敢ないものである。萬世不易の法に従つて行ふなどといふことはない譯である。謂はゞ其場々々々其時に適するやうなことを行つて居るに過ぎないのである。

ハ 個人の社會に於ける意味

斯く云ふときは、如何にも人生は果敢なき詰らぬものゝ様であるけれども、一面から考へて見れば亦意味がないではない。即ち孔子が論語の中で云はれて居ることなどといふものは何れも之れを今日に應用して差支ない、又諸外國に往いて之を行ふて見ても差支ない。即ち一切の社會に通じて一樣に行はるべき所のことであるからして餘程廣い精神を持つて居るものと謂はなければならぬ。又社會の一種の道德的關係は變化すべからざるものがあると云ふとを示したものである。君君たり、臣臣たり、父父たり、子子たりと云へる如きは、是れは何れの時代に於ても斯くなければ

道德の不變的方面

道德は變遷する者なり

個人の屬する團體

ばならぬことであるし、又朋友信ありと云ふて見るも、やはり何れの時代と雖も何れの社會と雖も斯の如くなければならぬのである。斯様に考へるときには、道德にしても、さう容易に變遷すべからざるものがある。と云ふことは明かである。けれども是れは變遷しない方を云ふただけのことであつて、變遷するものもあるからして、大體から云へば道德は先づ變遷すると云ふ方が當つて居るのである。

個人は社會に於て如何なる位地を占めて居るかと云ふと、其の國家的の位地は之を別として、家庭の一員たり、又村落の一員たり、種々の會合の一員たり、乃至は

個人は社
會と共に
變遷す

四十

國家の一員たるものである。其の範圍に於ては各人相當な義務があり、權利があり、又職務があるからして完全に之を實行せなければならぬ。所て其等の間にある所の關係は社會と共に變遷するものであるからして、人間の社會に於ける意味は重大なる、密接なるものであると同時に、社會其者の變遷と共に變遷するもので滄溟の一滴といふが如き状態に過ぎないのである。宇宙に於ても小なる所の人間は社會に於ても亦小なる所の人間である。殊に社會と運命を共にして居る所のものと謂はなければならぬ。

三 人生の義務

イ 義務の觀念

社會に生活して居る以上は、吾人人類は必ず義務の觀念を有たざるを得ない。義務は道德的の觀念であるけれども、此の觀念を有して居らぬ人間は殆ど之を發見することは出来ない。中には此の如き人間もあるに於て、それは例外と云ふより外ない。例外があれば眞理でないやうであるけれども、人間社會ではどのみち之を例外と看做して、義務の觀念の存在を以て一般の法則とせんければならぬ。

社會に對
する義務

必ず之を
守らざる
べからざる

道德の方面から吾人は是非共斯の如くせんければならぬといふ一種の感情がある。此の感情が存在して居る以上は是非共之を實行に現はして見なければ満足する事は出来ない譯である。然らば義務は如何なる法則に従つて行はるゝかと云へば、つまり倫理習慣其者である。よし今從來の倫理習慣を愚なるものとして自分一個の意見に従つて斷行せんとするに當つても、亦必ず何か其處に一種の道德的根據がなくてはならぬ。即ち從來の倫理道德が、悪いものである、詰らぬものであると云ふ道德的根據がなくてはならぬ。むやみに之を排斥することは出来ない譯で、何が故に

義務と倫理習慣

從來の道德を排斥する論據

悪いか、何が故に詰らぬかと、何が故にといふことがなくてはならない。その何が故にといふことは單なる論理的の問題でなくして、全く道德的問題である。言換へれば、自分の感情に合はないのである。自分の性格に適さないのである。この性格といひ感情といふものは即ち自分の道德的感情であるからして、人間はどうしても道德的感情を免るゝといふことは出来ない譯である。

されば苟も社會に生活する以上、自己が義務として感ずる所のものは之を行ふことに力むべく、又假令その義務が馬鹿らしいものであるとしたならば、何等か

馬鹿らしいこと

他の有力なる根拠を發見して來なければならぬ譯である。どのみち義務といふことは、社會に生活する吾人人類の離るゝことの出來ない譯のものである。

口 社會

吾人は先づ社會の爲といふ事を忘るゝ事は出來ない。道德は何を以て標準と爲すか、西洋の道德學に於ては種々議論のあることである。快樂を以て其れだとする者もあるし、最大多數の最大幸福を以て其れだとする者もあるし、又或は人間の本性の實現を以て其れだとする者もある。いろくあるけれ共、要するに社會の爲といふことが道德の論據であらうと思はれ

道德の標
準は「社
會のため」

孝行の眞
意

る。若し道德其者の淵源について之を考へて見たならば必しも社會の爲と云ふことはないであらう。例へて見れば、親に孝行を盡す君に忠義を盡すと云ふて見ても、それが其の儘社會といふ意味を包含する譯ではない。即ち親に孝行をする人は、それが社會の爲であるから孝行を盡すと云ふ譯ではない。唯自己の感情上是非共親の爲を圖つて遣りたいと思ふ所から之を行ふて居るだけのことであるが、此の感情を名づけて孝行と云ふのであつたならば、孝行には社會的の要素はないのである。それは忠でも同しとである。其他所謂私徳といふものに於ては皆同一の論法が當嵌

まる譯である。然るに孝といふことが各人に取つて一様に必要であると云ふことを認めて社會が之を獎勵するやうになる。換言すれば、其の社會に於て孝といふ言葉が出来て來て、一般の人が誰となく彼となく皆孝でなければならぬと云ふて孝を重んずるやうになつて來るといふと、是に於て初めて孝が一種の社會力となつて來る。此の如くなると云ふと、社會の爲といふとの意味が起つて來るのである。社會は何故に孝を獎勵するかと云ふと、孝といふ事が社會の爲に必要であるからと云ふのであつて、是に於て初めて社會の爲と云ふ事が出て來るのである。言換へれば、社會

社會力

社會の教訓

力となつた後初めて社會の爲といふ考が出来て來る譯である。これが若し單に孝行といふて親に對する感情のみから言ふたならば、社會といふ意味は全く無い譯である。此故に倫理が社會の爲であると云ふ事は、つまり其れが社會の教訓となつた以上の話である。苟も社會の教訓となつて居るものは獨り孝のみではない。凡ての道德は皆社會の爲といふ意味を包含して居るのである。或は道德の中には個人にのみ關係したのもある。慎獨と云ひ忘我と云ひ、皆自己にのみ關係して居るやうであるけれ共、是れとても矢張り社會の爲である。つまり斯くやる方が社會一般の發

自己的
徳の社會

達を助け幸福を増すと云ふ所からして社會に於てこれが獎勵されて居るのであるからして、同じく社會の爲といふ意味を包含して居る。由是觀之、倫理と云ふものが社會一般の教訓となつて居る以上は、必ず社會の爲といふ意味を包含するに違ひない。さうでなくして、若し其の淵源に遡つて之を論じて見れば、必しも社會の爲と云ふことはない譯である。

所で、普通に倫理といふ以上は、既にそれが社會一般のものになつて居ることを豫想して居る。此の方面から見れば、倫理は社會の爲と云ふを以て要素として居ると云ふことが言へるのである。倫理の淵源――

倫理は社會一般のもの

言換へれば倫理の因つて起つて來るところの源は、其れは個人の感情に在るに違ひない。けれども、是れは源だけのことであつて、倫理其者としてではない。倫理其者として現れて來るのは、社會の教訓となり社會の倫理となつた以上のことである。然る以上は、倫理は即ち社會の爲といふ考を包含して居ると謂ふべきである。

是故に吾人は社會に生活して居つて其等の教訓に依りて作り上げられたるものであるからして、自己の生活上自然に社會の爲を圖らざるを得ないことになつて來る。それで社會に生活する以上は是非共この

吾人の本
性と倫理
習慣

倫理習慣を守らなければならぬ。之を守るのが吾人の本性に適つて居るとになる。又社會の中に生活して社會の恩恵を被むつて居る以上は、社會の爲めに盡さなければならぬと云ふことは一種の道德的の感情であるけれども、以上の方面から觀てもやはり社會の爲に盡すと云ふことは當然なことである。吾人が社會的生活を爲す以上は決して社會の爲といふ考を離れることが出来ない譯である。

ハ 人生の義務と社會の活動

人間の宇宙に於るや實に極小なるものである。時間空間に於ては殆んど何等の意味もない。蒼海の一

宇宙は大
心は大

公侯將相
案外覺悟
なきやも
知れず

滴も音ならず。而かも心は即ち大なるものがある。娑婆の世の中に於て安心不安心などといふては大に其人の心に關係せざるを得ない。社會の變遷と共に變遷するは吾人人生の習ひなるが此變遷に従ひながら安心立命の位置に達せなければならぬ。棺を蓋ふて而して後名定まる。安心か安心してないか。最後の瞬間を見なければ其人物も判定するとは出来ない。今日公爵と言ひ、大將と言ふて時めく者も死んで見なければ果して如何なる心だか判らない。案外覺悟がないかも知れない。況んや人生の最後は如何なるものなるかを覺悟するものは少ないであらう。

天然に放
任して自
然の死を
待つ

吾人の見る所を以てすれば人生の最後は此五尺の身の終焉でない。活動の終焉である。五尺の身體の終焉が同時に活動の終焉となるのもある。けれども五尺の身體はあつても已に何等の活動力を失ふて居るともある。天然に放任して自然の死亡を待つは必ずしも人生の最後を覺悟した者とはいへない。何んとなれば自己の意志から自己の最後を決したのでないからである。自己の最後を決するは即ち自葬であるが、自葬は自殺ではないから先づ自殺論から述べて見たいと思ふ。

社會は人間の結合である。社會の活動は即ち人間

社會の義
務と人間
の活動

の活動に由つて生ずる。人間の活動が止まれば則ち社會の活動も亦止まるのである。人間の生命は社會に由つて保たれて居る。されば社會のために盡し、社會のために大に盡くしてやらなければならぬといふのは此れ以上説明を要しない自明の理である。

此點より見れば自殺は實に不道德な現象である。社會を忘れたると甚き者である。又一面から言へば極めて卑怯未練なる行動である。活動力あるものが之を實行したとすれば社會を毒すると甚きものである。其上人生の最後を覺悟せず、社會を忘れ、宇宙を忘れたるものである。何ぞ宇宙を忘れたるかといふに

自殺の愚
なる

人間の宇宙に於るや實に一少極微分子に過ぎない。乃ち其點に於ては何等の意味もないものだといふとを知らない。明に宇宙を怨んで自殺するのである。吾人は此に於て自殺と自葬との區別を論ぜなければならぬ。

四 自殺論

イ 自殺は社會に免るべからざる現象なると

自殺は何れの社會に於ても免るべからざる現象であつて社會の状態に由ることが大である。佛の社會學者デュルケームは其の有名なる「自殺論」に於て自殺は一つの社會現象であつて、一見すれば個人の氣質に根ざすが如くなれども其の實は社會状態の結果に外ならないものであるとした。實際自殺は統計上一定の規則に隨ふものであつて、個人から見れば自由に爲されるのであるけれども全體から見れば一定の規則

自殺は社
會状態の
結果

自殺の規則正しきこと

に當嵌まるものである。即ち自殺は社會状態によつて支配されるものであり又社會の状態によつて其の數が規則正しく變動するものである。故に自殺は單なる個人的現象でなく一つの社會現象であつて、何れの社會にも免るべからざるものである。

先づ自殺の規則正しき現象であつて自殺數の割合は國によつて畧一定せるとを示さんに、メーヨスミエの「社會學と統計學」によれば一八八七年より一八九一年に至る五年間の平均數は人口百万に對して左の如くである。

- 丁抹二五三。
- 佛蘭西二一八。
- 瑞西二一六。
- 普魯士

一九七。 奧太利一五九。 白耳義一二二。 瑞典一一九。 バヴリヤー一一八。 英克蘭八〇。 諾威六六。 和蘭五八。 蘇格蘭五六。 伊太利五二。 愛耳蘭二四。 サクソンは自殺の割合が非常に多く、一八六二年より一八八六年に至る人口百万に對する平均數は三二二であつたのに、一八八七年に於ては三四〇に増加した。露西亞は百万に對して二七で其の割合が少い。西班牙も亦少い。北米合衆國に於ては一八八一年より一八八五年に至る五年間の平均數はコンネクチカット一〇三。 マサチュセット九一。 ベルモンド八七。 イドアイランド八二である。此の如く自殺數は國に

國により
て一定す

よつて非常に異なるもので相接近する國と雖も其の數が非常に異なるのは瑞典と諾威、佛蘭西と白耳義、白耳義と和蘭の例によつて明かである。而して自殺數が國によつて略一定して居るとは自殺の絶對數の示す所である。又自殺數増加の割合も國によつて異つて居る。人口増加の割合に對する自殺増加の割合は百人に就きて左の如くである。

人口増加の割合

自殺數増加の割合

瑞典	〇・八一	一・五
佛蘭西	〇・〇七	二・〇六
伊太利	〇・七	一・二八

普魯士 〇・九八

一・〇七

各國共に自殺數の増加するに反し獨り諾威に於ては十九世紀の初より漸々其の數を減少した。然るに普魯士は二倍、佛蘭西は殆ど三倍の増加を來した。英吉利に於ては其の數が甚だ規則正しく大概百萬に對する六六の割合であつたが、近來非常に増加して一八九一年には八五となつた。

口 自殺は社會の狀態に伴ふと

以上の如く自殺數は各國に於て一定するものとせば各國に固有なる自殺の傾向があるものと見なければならぬ。自殺は此の傾向に従つて規則正しく行は

各國に固
有なる自
殺の傾向

れるのである。而して以上の如き統計上の差異は國を異にするによりて起るものであるから其の原因は個人にあらずして國の状態にあらねばならぬ。即ち此の如き差異は國によつて種々の條件が異なるからである。即ち一般の社會狀態、例へば社會の經濟狀態とか社會の習慣とか社會の文化の程度とか云ふが如きものとか、或は氣候とか人種とか云ふものゝ異なるに從つて規則正しく自殺數に差異を生ずるのである。一般に社會狀態の如何によつて自殺數が異るとは明かなことである。經濟狀態に就いて云へば、戰時、凶年、貿易不振の時等は自殺數が増加するのは統計の示

す所であつて英吉利にては輸出入の割合に隨つて自殺數が變動すると云ふことである。社會的習慣の異なるに從つて自殺數も異つて來る。歐羅巴に於て舊教徒よりも新教徒に自殺が多いのは之が爲めであらう。又文化の進んだ所は自殺が多い。精神の發達が神經の紊亂を起し易いからである。其の他都會は村落よりも自殺の割合が多い。都會に於ては種々の缺點ある人が入り來ると共に都會の生活は非常に神經を興奮し易いからである。かう云ふ風に自殺は社會狀態によつて支配されるゝことが頗る大であつて、社會狀態が理想的にならない限り自殺は社會に免れないもの

氣候と自殺との關係

である。此の外氣候とか人種とか年齢とか種々のものゝ異なるに従つて差異を生ずる。今其の一例として氣候と自殺との關係の規則正しきことを示さんに、自殺は春や夏の暖い時に多く、冬の寒い時に少い。日本の氣候でいふと、一二月頃から漸々増加して七月頃は一番多く、それから漸々減少して十二月から一二月頃になると一番少い。これは毎年規則正しいものである。つて試みに最近の統計を示せば左の如くである。

一月	四十年	三十九年
二月	四十一年	四十年
	六四五	六七一
	五七二	五五八
		五七四
		五七九

三月	七四三	七一七	七三一
四月	九一九	八〇一	八三三
五月	九七三	九一八	九〇九
六月	九三五	八六〇	八〇一
七月	一〇一五	一〇二四	九八六
八月	一〇一五	九九六	八〇六
九月	七七一	七五八	七一六
十月	七二〇	六八五	七〇二
十一月	六五一	五八七	六一五
十二月	六四一	六〇五	六五四

ハ 自殺は反動的現象なると

自殺の存在は、
在は乞食と
同の存在と
同じく免れ
ずるべから

自殺ある
が爲に自
殺なし

以上述べ來つた如く自殺は社會の狀態に應じて規則正しく行はれるので、何れの社會にも免るべからざるとは恰も乞食が社會から跡を絶たない如くて、此等是一種病的の社會現象である。社會に於て一方に樂天の人がある側には必ず悲觀の人があるのは免れぬ。一體人は反感的になり易いもので、一方に樂天の人があると反感的に悲觀に陥いる者がある。自殺する者がある一方には之を愚として賤しみ笑ふ者がある。かういふ風に社會は反動で以て釣り合ひが取れて居るのであつて、自殺がある爲めに反動として自殺を惡む傾向があるのであるから、自殺があるといふことは

自殺は黄
金世界で
も免れぬ

自殺を防止するに力あるものである。此の點から見れば自殺の存在は社會の維持上必要なことであると言へる。

二 自殺の愚なると

以上述べた所に於て明かなるが如く、自殺は何れの社會に於ても免るべからざる所の現象で、殊に一種の規則に従て行はれて居るものであるが、自殺其者を道徳的に考へて見ると洵に愚なるものである。第一是れは意志の薄弱なることを示したものである。何故なれば、社會に立つて大々の活動をすれば如何様にも出來るのである。社會の困難に遭遇して是れに失

自殺は意志の薄弱を示すもの

敗して自殺するといふのは即ち意志の薄弱なることを示して居る。殊に男女痴情の果に於て自殺する杯といふことは、是れは既に知識の缺乏をも示して居る。何れにせよ社會に立つて活動すれば十分に事を爲し得る所の者が自殺すると云ふことは決して譽めた事柄ではない。即ち自分の活動力は尙餘りあるのであるからして、盛に此の活動力を發揮して以て其の一生を終るのが生を此の社會に受けたる者の任務であらう。

人生は朝露の如し

人間の一生はどうせ朝露の如きものである。誰でも死ぬものに極まつて居る。けれども早く死んでし

自殺は不道德

まへば其れだけ社會の害になる譯である。成丈活動力を發揮してそれ〴〵仕事をして然る後其生を終るのが社會の爲になる所以であつて、是れが各人の當に盡すべき所である。今日精力主義といふ言葉があるが、實際精力のあらん限りを盡して、精力の盡きるのを待つて死ぬといふところが人間の務であらう。精力の尙存在して居るにも拘らず、之を齎らして自殺して了ふと云ふのは社會に對する大罪惡と云はなければならぬ譯である。此故に自殺は其人の一種の罪惡で社會に對して盡すべき所の義務を忘れ、人生の運命を没却したる所のものと謂ふべきである。不道德である

と同時に又極めて愚なるものと謂はなければならぬ。シヨールペンハウエルは、自殺は必しも咎むべき行爲ではないけれども愚なる行爲であると云つた。自殺するよりも先づ自分の意志を否定せよ。意志を否定しさえすれば即ち自殺したも同じとであると云つたが、是れは哲學上から云つたことである。けれども、是れにした所で矢張り自殺を以て愚なる行爲としたのである。

ホ 是認すべき自殺

自殺は、意味の取様に依りては必しも悪くはないと云ふのは、彼のストア哲學に於ても又は儒教に於ても

意志の否
定

ストア學
の自殺
觀者

之を見ると出来る。ストア哲學に依れば、賢人は己れの自由なるを證明するが爲に自殺するものであると云ふのである。即ち自分で自分の命を支配することが出来ると云ふのは、自分に自由意志を有つて居ることであり、且又自分の慾望を十分に節し得たのである。此點に於て自殺は譽むべきであるといふのは、つまり自分の命よりも寧ろ節制といひ若くは勇氣といふ道德に重きを置いたのである。元來生命を以て最も大事なものであるとするのが、是れが心得違ひである。生命よりも尙ほ大事なものがある。即ち彼の情死するところの男女にしても生命より男女の

生命よりも
戀愛

戀愛を大事に思つてするのである。今生に於ては契りを結べないからして來世に於て契りを結ぶといふ、即ち男女の愛情に重きを置いたのは彼等に取つては生命よりも愛情の方が重いのである。或は又保険金を取りたさに自殺する者がある。是れは生命よりも金の方が大事なのである。だから世の中の有様から考へて見ても、總ての人が悉く生命を重んずるものではない。命あつての物種と云ふけれども是れは普通のことである。命よりも更に大事だと思はれるものが此の世には幾らもあるのである。左様に言ふと大に社會の風俗を紊すことになるか

命よりも
大事なもの

身を殺して
仁をなす

らして、先づ命が大事だと云うて命を第一に置くのだけれ共、他の一面から考へて見るといふと、社會には兎に角命よりも大事なものがある。ストア哲學に於ても既にさうである。即ち命よりも自分の克己心が大事だといふ様な譯で、自殺に依つて自分の自由を表明するといふ位のもので、命よりも克己心に重きを置いたのである。儒教に於ては志士仁人は身を殺して以て仁を爲すと云ふことがある。是れも矢張りさうで、自分の命よりは仁の方が大事だからである。或は又死は鴻毛よりも輕しと云ふてある。謝疊山の句にも「義高則覺生堪捨、禮重方知死甚輕」といふとがあ

る。昔よりして志士仁人と云はれ義士忠臣と云れたる者は、多くは自分の命を輕んじて以て道德に従つたものである。是から見ても命は第一のもてではないのである。自分の命を自分で支配する上に於ては古人は必しも之を悪いとは云はない。自殺に付て西洋の哲學者の云ふた言葉にも、幾らも斯う云ふとがある。例へばロツクは、自殺は自分で自分を處置するのであるからして必しも悪くはないと云ふた。今日の道德から云ふても此の意味はある。自分で自分の身體を處置するに於てはそれ程悪いとも云ひ難いものである。此の點は悪くはないけれども、唯社會に對する義

ロツクの
自殺説

自殺と其
の影響の
有無

務を懈るといふ點に於て宜くないのである。言換へて見れば、外の人に對する影響があるから宜くないと云ふだけのことである。若し其の影響がないとすれば自殺と雖も必しも悪いとは云ひ難い譯である。若し一人の人間があつて、既に社會に對しては何等の義務をも盡すことが出来ないで、其の人間が有るか無いかをも人が知らない孤立な人間と假定して見よ。其の人間が溝壑に投じて命を抛つたとしたならば如何であるか。必しも之を悪いとは云へないであらう。それは即ち影響がないからである。是れから考へて見れば、自殺といふことは必しも悪いとばかり云ひ難

命よりも
大切なもの

七十四

くなる。又命といふ者は必しも結局大事なものとする
ることが出来ない、命よりはまだ大に大事なものがある
のだといふことを考へなければならぬ譯になる。

然れども兎に角活動力のあるところの人間が、殊に
青年が痴情の果に於て、若くは目的を達せられないと
云ふ失望の極に於て自殺をする杯といふことは、知識
が足りないか、意志が薄弱であるかを示すものであつ
て、極めて愚なる行爲と謂はなければならぬ。吾輩は
徹頭徹尾此の如き自殺に對しては不賛成なるもので
ある。それと同時に又自分の命よりも何等か肝要
なるものがあると云ふことを信ずる者である。

自殺には
大反對

五 活動の終焉と自葬

イ 生命と眞理

以上述べた如く、命あつての物種と云ふとは即ち普
通の人情である。命が大事だといふのも矢張り是れ
は通常の話である。其の實を云ふたならば命よ
りかも尙更大事な者があるのである。通常の場合で
なく非常の場合に遭遇するといふと必ず之を感じ
るに違ひない。身を殺して以て仁を成すが如き時に於
ては、必ず命よりも大事なものがあると云ふことを
感ずるであらう。唯通常の場合に於ては此の如き機

命あつて
の物種

七十五

會に遭遇しないのみである。此の如き機會に遭遇し
 さへすれば是非共此信念を得て來なければならぬ
 譯のものである。誰でも此の機會になれば此の信念
 に達するものとすれば則ち命よりも尙大事なもの
 あると云ふことを信ぜざるを得ない。何であるかと
 云へば上に述べた如くいろくくの學派に依つても違
 ふけれども儒教に於ては仁を以て重しとして居るし、
 又ストア哲學に於ては克己心を以て重しとして居る。
 彼等は命は要らない。命よりかも此の如き先天の眞
 理を重んずると云ふのである。先天の眞理即ち仁と
 か又は克己心とか云ふが如きことは誠に玲瓏透徹な

命は要ら
ない

徹上徹下
の理

ものである。謂はば徹上徹下なるものである。此の
 如きものを我が精神に得るといふと、其人の精神は非
 常なる光明を放つて居るものである。仁の道は何ぞ
 や。即ち上は堯舜より下は庶人に至るまで、又は上は
 孔子より下は一切凡夫衆生に至るまで悉く行ふべき
 所の道である。此道に到達したる人が即ち眞に賢人
 と云はれ聖人と云はれるのである。此道に背いた者
 が即ち愚人と云はれ又は悪人と云はれるのである。
 この愚人と呼ばれ悪人と呼ばれるのは志ある人の大
 に憂ふべき所のものである。此故に道に到達したい
 と云ふ考を誰でも有つて居るけれ共、勇氣がないから

愚人悪人

神の靈的
生活

實行することが出来ないので、若し實行することの出来る人であつたならば其人は仁に合體したものである。其人の人格は非常に高尚なるものである。普通の人よりは神となるものである、靈的なるものである。此の神の靈的の生活の意味が分らない者は即ち凡夫の衆生である。又機會がないといふと此の如き靈的の精神状態に到達する事が出来ないが、是れも亦憐むべきものである。普通命が大事だと云ふけれども、命よりも大事なものがある。大事なものは何ぞや。高尚なるものである。其の高尚なるものに一致到達する所の機會が出来た人は即ち幸福な人である。

幸福な人

自殺と克
己心

此の如く考へて見るといふと、吾々は必ずや身を殺して以て仁を成し、神の靈的の人格に到達したいと云ふ考を起すであらう。又克己心にした所で矢張り其れと同じとである。克己心と云ふことは凡ての人に必要なるものである。自分で自分の情慾を抑へる、殊に自分の身軀をも處置する事が出来ると云ふ様になれば、其人の克己心は非常に強いのである。此の如き強い克己心を有つて居る人の人格は心的靈的なるものである。心的靈的なる精神といふものは一人の人が有つて居つても、恰も金剛石の玉の如くであるからして誰でも之を得たいと思つて居る。誰でも之を理

想にするに違ひない。金剛石の玉は、たつた一つあつた所で、多くの人が同時に之を有つと云ふとは出来な
いけれども、精神上のことは幾つにでも分けることが
出来るものである。その分けることが出来るにも拘
らず、凡ての人が此の如きことを實行せぬといふのは
何かと云ふと即ち勇氣がないからである。由是觀之、
吾々は命よりも更に貴いところの神的靈的なる生
活があるのである、若くは神的靈的なる人格があるの
である。此の人格を重んずる所からして、死は鴻毛よ
りも輕しと云ひ、或は生命を捨つるといふ様な考も時
には人間の腦髓の中に出て來るのである。

神的靈的
なる人格

高尚なる
精神ある
人の理想

此の如く神的靈的なる生活若くは人格が、人間とし
ては洵に理想的なる状態であつて、此の状態を得たる
人は古今其例が少いのである。何となれば普通の人
は大概普通の状態に生活して居るばかりである、又普
通なることを實行して居るのみである。志士仁人と
稱せられる人は世に數が少いのと同じ譯である。さ
れば神的靈的の人格に到達すると云ふことは各人の
理想にはあるまいけれども、少くとも高尚なる精神を
有つたる人の理想とすべき所であらう。それも機會
がなければ必しも實行する事が出来ないものである。
吾々は生命よりも更に高尚なる此の如き眞理のあ

るといふことを信じて疑はないのである。

口 神的靈的生活に達する手段

凡夫の衆生は下等なる慾望に執着する所が多いからして、娑婆の氣を脱することが出来ない。金錢に執着したり、婦人に沈溺したりするものであるからして、此の娑婆を離れて高尚なる人格を養ふと云ふことが出来ない。唯此の娑婆に生きて居つて、通常に金も欲しいし、婦人も愛したい、または人とも遊びたいと云ふだけであれば是れは平凡なことで、別に稱するに足りたものはない。更に下等なる状態を云ふて見たならば、彼の下等社會の如くに、旨い物を食つて喜び、日々黄

凡夫は娑婆を脱する能はず

日々の生活を楽しむ

白を數へて少しも高尚なるを考へない。此等の人間に取つては命が最大の目的である。逆も此等の人をして心的靈的の生活を理會せしむるとは出来ない。心的靈的の生活を理會せしめやうと思ふには茲に一大決心を要するのである。

彼の道德に於ては國家の爲に命を捨てよと云ふことが云はれて居る。道德學を研究したる者は之を承知して居る。又通常の人と雖も此位なことは承知して居る譯である。けれども其の場に臨んで實際に命を捨てるとの出来る者は果して幾人かある。是れ即ち其の人に決心のないと云ふを示すものである。即

命を捨てるの決心

ち果斷のないと云ふことを示すものである。若し其の場合に於て斷然たる果斷を施して命を捨てることがあつたならば、其人は眞に道德に一致した人と云ふべきである。それを娑婆世界に執着をし、自己の命が欲しいといふ先づ謂はゞ下等なる慾望がある爲めに道德に一致するとが出来ないのである。彼の四十七人の義士のことに就いて考へて見よ。斷然主人の仇を復さうと思つた者は僅に五十位である。其餘の者は澤山居つたけれ共、愈々といふ場合になると云ふと其れ丈けの決心を出すとが出来なかつたのである。この決心が出ないと云ふのは何か。即ち自分のまわり

斷然義に
従ふもの
は少し

風船の綱
を切斷す
る

に妻もあり小供もあり、家もあり、屋敷もある。それを毎日見たり聞いたりして居つて、旨い物も食ひ、好い物を見て愉快を感じて居るのである。これ等を棄てるといふことが苦しいと思ひ厭だと思ふ。それで決心をすることが出来ないので、娑婆の氣に引かされて高尚なる神的靈的の生活に入ることが出来ないのである。風船の綱を切つて了ふと高く揚がつて了ふ。人間の眼には留まらなくなつて了ふ。娑婆の氣を切放して後に初めて人間は高尚なる生活に入ることが出来るのである。今彼の四十七人は此の娑婆のことはすつかり思ひ切つてしまつて斷然道德に従つたと云

言ふは易
く行ふは
難し

ふ點に於て彼等四十七士の決心の偉大なることを示して居る。此の決心は口で言ふと甚だ易い様であるけれども、其場に臨んでは極めて困難なるものである。此の決心の出来ない者は到底神的靈的の生活に入ることが出来ないものである。昔より志士仁人賢人君子といふ人は誠に多い様であつて其實は少いものである。人間の數が何千萬何億萬とあるに較べて見ると云ふと誠に寥寥として曉星の如きものであつた。何故に斯の如く少いかといふと、つまり此の娑婆に引かされて決心することが出来なかつたからである。此の點から考へて見るといふと決心と云ふとが第一

神的靈的
生活に入
りし人は
少し

必要である。決心をしてしひさへすれば心的靈的の生活に入ることが出来るのである。此の決心と云ふことが即ち平生の精神修養に依つても出来ることであらうが、凡ての道德に於て亦一樣に之を認めて居るとと思はれる。今之を述べて見やうと思ふ。

ハ 決心の修養

儒教に於ては人事を盡して以て天命を待つといふとがある。自分に出来るだけのとは盡して見て、それでも出来ぬと云ふことは是れは天命と諦めるより外はない。其處に自團駄を踏んで悔しがつたり悲しんだりするのはつまり是れは天命を知らざる者である。

天命を知
る

さうかと云ふて又殊更に身を溝壑に投ずるといふが如きとも是亦天命を知らざる者である。命を知る者は巖牆の下に立たずと孟子も云はれて居るから人間は人事を盡して以て天命を待つより外仕方がないものである。天命を信ずると云ふことは儒教に於ては根本のとなつて居る。之を普通の経験に就いて考へて見たならば如何であるかと云ふと、まだ少年の頃経験の少い時には、自分の思つたところが成功しないといふと非常に悔しがるものである。少し慣れて來るといふと其れが自分の運命だと云ふとを承知する。何故なれば其程精力を費さないでも案外結果の好いと

運命覺悟
の順序

もあるからして自然に運命といふ考が出て來て、運命に安んずると云ふことがある。即ち人事を盡して以て天命を待つと云ふことが誠に好い考であると云ふことを自覺するやうになつて來る。其故に儒教に於ては天命に従ふと云ふ一語に歸着するより外ないものである。

之を楊子又は老子の思想から考へて見るとどうか。やはり是れも天命に放任するのである。以て生くべくして生き、以て死すべくして死するは天の幸なりと云ふて居る。死ぬるとか生きるとか云ふとは是れは自然の法則に従つて居るものであるからして、殊更に

楊子及び
老子の運
命觀

執着を離る

長く生きやうとするのも宜くない、殊更に早く死なうとするのも宜くない、自然の法則に従つて生きたり死んだりするのが天の幸だと云ふて居る。幸といふのは語弊ある様であるけれども、つまり是れが自然の運命だといふことに歸着するのである。自然の運命であるといふことの裏には如何なる意味があるかと云ふと、其處で最早斷念せよ執着を起すなと云ふことが包含されて居るのである。此故に儒教にせよ、老子の教若くは楊子の教にしても、皆是れは斷念する、執着しないといふ意味を包含して居ると云ふことは疑ふべからざる所である。

佛教の説

一切萬法空

更に之を佛教に就いて考へて見たならば如何であるか。佛教では直接に執着といふ言葉を用ひ、執着を離れよと云ふことが云つてある。金剛經の中に、一切の有爲法は夢幻泡影の如く、露の如く又電の如しと書いてある。又般若心經の中には色即是空、空即是色と書いてある。即ち一切萬法は皆空のものだ、斯様に心得よといふのが佛教の趣意である。又之を他の言葉で云ふと、貪瞋癡の三毒を離れよ執着を離れよと云ふのが佛の趣意である。最早過去つたとに對して愚痴をこぼすのは宜くない、又自然に來つたることに就いて餘り多く悲しんだり喜んだりするのも宜くない、執

唯心論

着すると云ふとを離れてしまへ、さうすれば一切萬法は悉く是れ空なるが如くに思はれる。空だと云ふのではない。空なるが如くに思はれると云ふのである。つまり空なるが如くと云ふのは先きのものが空だと云ふのではないので、我に取つては空なるが如くに見えるると云ふので即ち我の精神状態を示したものである。されば佛教の方面から觀ても、やはり執着せぬ、思ひ切ると云ふことが其教の要義になつて居る。古來賢人君子の爲したる所を見るといふと、何れもこの思ひ切る、執着せぬと云ふことが一番根抵のやうである。此の故に吾々が此の世界に於て生活する以上は決斷

執着を離る

といふことがなくてはならない。決斷といふことはつまり娑婆に對して執着を離れると云ふことである。執着を離れると云ふのは何かと云ふと、つまり他の一面に於ては高尚なる眞理を得るのである。心的靈的の生活に入るのである。佛教に於て執着を離れると云ふことは、何かと云へば矢張りこの神的靈的の生活に入るのである。若し神的靈的の生活に入ることなく、只世の中は夢の様だと云ふて居つたときには是れは誠に愚なるものである、何等の稱すべきことはいないのである。娑婆の執着を離れて之を露の如く電の如く思ふと云ふのは、即ち他の一面に於て我が心を高

吾心を高尚にす

高尚なる
境涯の
信仰

尙ならしむると云ふことが豫想されて居るのである。由是觀之、決斷といふのはつまり思ひ切ると云ふことを意味する。思ひ切ると云ふのは執着がないと云ふことを意味する。執着がないと云ふのは即ち娑婆に而して其の一面に於ては神的靈的生活といふ高尚なる境涯の存在を信じて是れに従ふべきことを豫想して居るのである。

ニ 自 葬

活動力な
きものは
斷念すべ
し

是故に若し之を極端に言ふて見たならば、最早既に活動力の全く消滅したる者は斷然此の社會を斷念せ

一個の肉
塊

んければならないのである。一縷の望を置くと云ふのはつまり卑怯未練なる行動である。自殺者の愚であると言ふ譯は活動力を齎しながら死すると云ふ點に在る。社會に對する一つの道德的の罪惡であると同時にまた極めて愚鈍なることを示すものである。けれ共、既に活動力の消滅したる者に於ては更に活動の餘地がないのである。一個の肉塊があるのみである。一個の肉塊があるのみである。生命は何等の意味もない所のものである。社會に於て意味がある所のものは即ち活動力である。活動力を失つたる以上は何等の意味もないのである。何

自殺と自
葬との差法理
的方

等の意味もないものを保存して置くこととは必しも望むべき条件ではない。是故に若し出来得べくんば自分で自分の生命を終るべきである。是れは自殺とは大に意味を異にして居る。自殺は活動力を殊更に消滅することを意味するけれども、自葬は活動力のない單なる肉塊を自分で處置することを云ふのである。此故に若し是れが理想論として觀察するとき、に當つては自葬は斷然行はるべき性質のものである。極端に言ふたなら、最後の死ぬといふ瞬間に於て自分で以て自分の身軀を悉く消滅せしめることが出来たならば、此の位自分の意志を十分に表明したるものは

ないのである。けれども此の如き議論は今日世界に存在して居らない。己む能はずんば或は自葬といふことが宜いかとも思はれる。

自葬などといふと、世間には或は之を以て狂的のたと爲す者があるであらう。けれども理想論として之を考へて見たならば、今言ふた通り自葬が最も好き手段であらうと思ふ。活動力なき者の最後の瞬間に於て自分の生命を終はらせると云ふことは即ち自分で自分の身軀を處置するのである。ストア哲學に於て賢人が自分の身軀を自分で處置するが如きものである。即ち最後の瞬間まで自己の意志の存在を證明す

最後まで
自己の意
志を保存
する

るものである。最後の瞬間に至るまで確乎たる意志は如何なる性質のものであるかと云へば則ち果斷といふことを以て最後の要素として居る。而して他の一面に於ては心的靈的の生活を豫想して居る。何となれば自己の意志を以て最後の瞬間を止めると云ふことは是れは一つの主義である、一つの原理であつて、此の原理たるや各個人の精神に於ても必ず然かあるべきものと豫想するからである。

然れども種々の事情に由つて必しも實行出來ない。實行出來ぬときには是れは己むを得ないけれども、其の理想論に於ては少くとも間違ひはないものであら

自己の意
志を以て
自己の最
後を處置
す

大和魂と
決心

う。活動力のない單なる肉塊をして生命を止めしむると同時に、他の一面に於ては自分の意志をもつて處置する一種の神的靈的の生活を保存するものである。唯實際問題としては必しも是れが實行出來るとは云へない。自分は此の説を終はるに望んで一つ注意したいと思ふのは、此の如き決斷といふことが凡ての教義の基礎となつて居ると同時に、吾々日本人に取りても亦根本のものであらうと思ふ。何故ならば、彼の大和魂なるものは種々なる要素を包含して居るに違ひないけれども、兎に角娑婆に執着せぬ、身を殺して以て仁を成すと云ふことだけは明かに之を表明して居る

からである。此故に此の點から見ても決心といふことは大和魂の精華の現れたる部分を示して居ると思ふ。是故に自分は理想論として自葬の好いことを信ずる。

ホ 葬式の改良

今日の葬式を見ると如何にも虚飾が多い。言はゞ贅澤三昧を盡くして居る。中には音楽を雜ぜるものもあるし、又中には揃ひの衣服を新調して之を出入人一同に着せるものもある。又生花なども澤山の列をなして到底死者の靈の見盡くすことの出来ないものもある。司葬者は行列の華かならんとを希望する。世間

の人も成る丈華かにしてやりたいものだと思ふ。孔子曰はく「禮は其の奢らんよりは寧ろ儉せよ、喪は其の易めんよりは寧ろ戚せよ」と。實際今日の東京の町家などの葬式を見ると周囲の騒ぎが餘り劇しいから家人は寧ろ呆氣に取られて氣が其方にまぎれて居る様である。此れでは人情にも外れて居るであらう。吾人を以て之を見れば死者は固より之を斷念すべきであると同時に周囲の人も亦斷念しなければならぬ。死して後に何等知る所はないのである。其れで後の大騒ぎをするなどといふとは生存者自身を喜ばす丈のとて、死者に取ては何の役にも立たない。故に

此の如き風習は斷然止めて成る丈質素にして哀戚の情を盡くす様にしたい。

其上葬式の費用位無駄なものはない。多くの金を費して作つた棺、花、衣服等は二度とは用ひられない。其場で終つて了ふのである。若し此れ等の金を以て實際の事業を經營したならば其れこそ國家社會のためにもなるであらう。其上死者の志を繼ぐとも出来るであらう。余は此點に於ても自葬の必要なるを信ずるのである。昔支那の墨子は節葬といふとを云ふた。即ち當時の葬式が餘り贅澤に流れて徒らに富を費消するを難じた。それで明治の今日に當つて

も墨子の説を反覆したいと思ふ。其上進んでは全然葬式を廢したいと思ふのである。

評 論

遠藤隆吉

百四

著者佐伯剛平先生は死に臨みて泰然自若毫も狼狽の色なし。數日前余其病床を訪ふ。曰はく余が命は今や恰も時計の音を數ふる如く刻一刻に近きつゝあるのみと。言ひ畢りて一笑す。余見て其決心の堅きに驚く。以爲らく古の偉人豪傑と雖も亦必ずしも然ると能はざりしならん。況んや今日の人に於てをや。高位高官の者必ずしも能くすること能はず、學識豊富、技藝卓越の者亦必ずしも然ると能はず。富鉅萬を累ぬるもの亦固より此くの如くなる能はず。著者の如

きは之を今日に求めんとして而して得べからず。之を古人に求むるに亦容易に其倫を發見すると能はざるなり。禪僧の道、死に臨むの用意を以て一大事業となす。或は信書を發し以て死期を知友に告ぐるものあり。死に臨みて周章狼狽するが如きとあらんか。是れ生死を解脱せざる者にして平生の說法全く其實を失ひ、而して名亦之れと共に墜つ。今著者は乃ち此大事業を行るに平々易々恰も平生に異ならず。余東西の史を讀み、時々「死に臨みて歸するが如し」といふものあるを見しが、今日のあたり其人を見る。實に感嘆の情を禁ずると能はざるなり。

百五

余著者の知遇を受ると數年。熟ら其人を察するに容貌雄偉、毅然として偉丈夫の風あり。言論風發、條理一貫、而かも善く人の意表に出るものあり。行苟もせず、義を守て堅く、眞に所謂男子の本領を發揮せるものなり。余會津に遊ぶ毎に必ず談論以て啓發の益を得ると少からず。先生又屢余を訪ひ來り、以て與に語るべき者となす。今此稿を草するに當り、余が心緒の亂るゝものありと雖も、著者の雄壯なる旅路に臨みて此情を洩らすとを欲せず。

著者初め余に依囑するに本書を公にするを以てす。余其意氣の壯なるに服すると同時に餘り多く社會の

耳目を聳動せんとを憂ひ、多く之を抹殺せり。故に本書は必ずしも能く著者の意を表はしたるものにあらず。恐くは其半ばにも過ぎざるべし。然れども余が關係して以て世人に紹介する者としてば此れ以上なると能はざるなり。故に今其由來を記して以て著者及び讀者に告げんとす。

著者は熱心なる又眞而白なる自葬論者なり。自ら之を實行せんとしつゝあるものなり。其意要するに自己の意志を以て自己の活動力なき身體を處置せんとするに在り。故に著者は口を極めて其自殺と異なることを辨せり。余を以て之を見るに著者の此説たる

や理想的と實行的との二方面あり。前者は神的靈的の生活にして活動力なき肉體は自己の自由意志を以て之を處置すべしと謂ふに外ならず。後者は乃ち實際に進むて之を實行せんとするとなり。此實行は其時期を誤るとなきを保せず。人の生命は天に在り。名醫と雖も必ずしも斷言す可からず。何に因りて實行の期となすか。大に疑ひなきを得ず。且つや余自身に於ても著者の知遇を受けたるものとして著者の自葬を看過すると能はず。萬一人知れず之を實行したりしとなさんか。之を探るに相當の手段を取らざるを得ず。著者の家族知友蓋し皆同感ならん。即ち

著者にすら許す可らざるを以て廣く之を世人に薦むべけんや。余が著者の實行的方面の議論を抹殺せし所以の者は實に此に存す。

著者の精神は已に理想的方面に於て自由に發揮せられ何等の執著もなく著者の人格もまた世人の認むる所となりたりとすれば則ち五尺の肉塊の如きは暫く之を他人の爲すがまゝに任ずるも亦決して著者を傷くるに足らざるを信ず。余は著者を以て「自葬を實行する丈の理想的生活」と「豪邁果斷なる性格」とを備ふるを世人に紹介するを以て此に筆を擱せんと欲す。終りに臨みて重ねて著者及び讀者に謝せざるを得

ず。著者の趣旨は余に依囑せるがために大々的に發揮すると能はざりしとを。又讀者は余が紹介せるがために著者の説を痛快に聞くと能はざりしとを。然れども他日何人か起りて遺憾なく著者の説を發揮するものあるべきなり。

人生の最後終

跋

余已に右の評論を草し了り、之を印刷に附せしむ。十日信越地方を巡回し、又宇都宮に赴き、十六日歸り來れば計の已に至るに會す。慨然之を久ふし、往いて其狀を問ふ。夫人云ふ。昨日其目的を達せんとし種々苦辛せしが遂に能はずして已みぬ、而も終りには自ら諦らめ居りしものゝ如しと。余茲に於てか本書が必ずしも深く著者の意に反する者にあらざるを知れり。嗚呼著者は實に俠氣あり勇氣あるの人なりき。崇高潔白なると富士の雪の如く、義氣俊秀なると秋霜烈日

の如し。其一諾は金鐵よりも堅く、其志操は泰斗よりも貴し。余未だ此の如き人を見しことなく、事ある毎に之を語らんと欲すれども、其人已に亡し。轉た悲痛哀傷の情に堪へざるなり。嗚呼北の方奥羽を望む。嶄然として頭角を雲表に抽んづるもの、今や則ち亡きなり。惨なる哉、寂なる哉。

明治四十四年十月二十二日

遠藤隆吉謹誌

著作
所有

明治四十四年十月
明治四十四年十一月
日印刷
日發行

(人生の最後奥付)
定價金貳拾八錢

著者 佐伯 剛 平
發行者 大橋 新太郎
印刷者 飯田 三千太郎
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社 秀英舎 第一工場
發行所 東京市日本橋區本町三丁目
博文館

● 振替貯金口座東京二四〇番

第二高等
學校教授
文學士 杉谷泰山君譯

◎人間の研究

(全二冊)

四六判上製美本
紙數二百九十六頁
正價金七十五錢
郵税金八錢

見よ人間の解決出てたり破天荒の研究なり青年讀まば天地闊歩の勇氣を生じ老人讀まば始めて長夜の夢を破らん東西の哲學科學を拉し古今の宗教經綸を提へ來て人間の本體と過去未來現在とを明瞭にしたるけ學者宗教家の必讀を要し人生の方針身心の修養を根本的に開示したるは教育家實業家の必讀を要し親子の先天的關係論は父母たる者の必讀を要す見よ

大哲フイヒテリ演述

文學士杉谷泰山君紹述

◎人生人間天職論

全一冊菊判
正價五十五錢
小包料金八錢

人間の自覺、人間の本分、自他の實在、社會の成立、國家の發展に就きて、破天荒の見解を與へ、天下を率ゆる學者紳士の本領に關しては、驚天動地の大字あり、爲政家の用意、教育家の覺悟、著述家の準備等に論じ及びて、或は誨へ、或は誠め、殊に將來の學者紳士を以て任ずる學生の用意覺悟、成功の秘訣、天才と勉強との關係智能の發揮、徳器の修養等に至りては、千古の卓説なり、更に又本書の後半は、人生問題の解決にして、人生に對する疑問宇宙に對す

故 中江兆民君著

◎一年有半

全一冊菊判
正價三十五錢
郵税金八錢

兆民先生空しく歴代の奇才を抱き久しく天涯の旅寓に病む其自ら起たざる事を知るや 褥中筆を揮ふて滿腔の心血を披瀝し題して一年有半と云ふ其事既に悲壯なり其文豈神ならざらん其古今を笑殺し一世を罵倒する所慷慨楚騷に過ぎ沈鬱杜詩に似たり天下の有心兒來つて 東洋ルーソーの大本領如何を見よ

同 君著

◎續一年有半

正價卅八錢
郵税金八錢

●一名無神無靈魂

る難問に起點して百問百答を試み、遂に人生に對する一大信仰の旗幟を鮮明にし、以て新天地に新生活を得て、一大快哉を呼べる所は實に宗教と哲學とを一丸とせるフイロテリの大手腕家なり、三讀四讀之を重ぬる毎に、益々心廣く體胖なるを覺ゆるは本書の特徴なり。

田村逆水君著

◎人生と健闘

正價參拾錢
郵税金六錢

同 君著

◎成功と人格

正價卅五錢
郵税金六錢

盲天外森恒太郎君著

◎一粒米

全一冊菊判
正價四十五錢
郵税金八錢

著者不幸病に罹りて明を失し悶々の極一時死を希ふに到りしが偶々著を逸せる一粒の米によりて豁然悟る所あり肉眼は明を失して長しへに物を觀る能はざるも心眼は忽ち開けて物々明了生の尊くして樂しく人生の荷も過すべからざるを悟るに到れり此書は其經過曲折を記せるもの 着眼機慧行文流麗近時稀に見る所の明著とす 煩悶の渦中に漂ひ失望の淵に沈める士は乞ふ一本を見よ

ジョン、ラスキン著
新渡戸農法學博士序

◎人間修養論

(全一冊)

四六判上製美本
紙數四百三十五頁
正價金七十五錢
郵税金八錢

本書は英國散文の大家ジョン、ラスキン氏の傑作「セサメと百合」を邦文に譯したるものにして讀書の要契を論じて神智靈覺の本義を體し或は女子教育と女子の本分とを論じて婦人の精神美の意義を發揮し或は其率莊重の態度を以て美術の根柢を人間問題と接觸せしめたるものなり江湖の男女學生はこれによりて新しき智見を啓發することの尠少ならざるを知る

區本 町三 丁目 博文館

發行所

東京 市日 本橋

新進化論

(六)

(博文館發行)
所說斬新
材料豐富
記事明快
圖書精妙

全一冊菊判洋布特製美本 正金貳圓卅錢 小包料金拾貳錢
紙函入紙數六百五十頁

本書の特色は『宇宙の進化』『地球の進化』『生物の進化』に
關する最近最新の學說を平明精確に記述したる點にあり

例へば(今より四年前に起りたる『宇宙及び地球の新進化説』又は『ダーウイン』以後の新進化論を
明確に示して、容易に其の要領精髓を味はしむるが如き在來の邦文進化論書の上に一頭
地を抜くものと謂ふべきなり)

著者は、生來化學的頭腦を有し、進化論の研究に思を凝らす事茲に年あり、本書は著者が殆んど

有らゆる進化論書を精讀し咀嚼して成りたるもの

其の間七箇年の長歲月を費せり

著者の叔父ジョン、ギユリック氏は、ダーウイン及びウォレスに認識せられたる有名の進化學者なれば、
著者の進化論に於ける、素養蘊蓄尋常一様にあらざること亦偶然にあらざること、その最も苦心せしは進化
論珠に近來の最も進歩したる進化論を成るべく解し易き様通俗平易に叙述したる點に在り、故に何人も此書
を繙かば能く進化論の要諦を理會するを得べし。

師講學大國帝都京 授教社志同都京

士學文 士博學神

著君クッリユギーニドシ

驚くべき世紀

(刊新最)
發行所
博文館

全一冊洋裝菊判上製美本 正文刷込寫眞版數十個挿入 正金九拾錢 小包金八錢

本書内容!

○十九世紀の功績

空前の時代。旅行の方法
海洋の旅行。自轉車と自
動車。思想の傳達
火と光。光の應用
塵埃。物理學上の發見
化學上の發見。電氣車
天文學上の進歩
宇宙の構成
地學上の發見

○十九世紀の罪過

進化論及自然淘汰
生理學上の發見
十九世紀の進歩—總收
催眠術及精神研究の叢
視
軍國主義—文明の弊
貧富の懸隔
土地の略奪
結論

原著者は進化論の歴史に於て、『ダー
ウイン』と其名聲を均ふしたる人に
して、『ダーウイン』とは全く獨立に『適
者生存』の理法を發見し、其他博物
學上にも大著述を出し、更に精神上
社會上の大作からず、就中其精該
博洽なる智識を以て、最も通俗に全
體に亘つて披瀝したるものを本書と
す。人類の歴史有て以來、空前の時
代なる十九世紀の科學界思想界に於
ける。驚嘆すべき發見進歩の蹟を辿
らんとする者必ずこの珍書を逸すべ
からず。

著原スーレオウ・ルセツラ・ドツレフルア
閱校君松代千川石 士博學理
譯君一茂島中

(七)

シヨベン
ハウエル
大作

意志と現識としての世界

(成完部全)

發行所
博文館

(八)

士博學文

姉崎正治先生著書

全三册
菊判洋布
上製美本

正價

上卷(七三頁)
中卷(六四頁)
下卷(七四頁)

金壹圓八拾
金壹圓六
金壹圓八拾錢

小包料金拾貳
小包料金 貳錢
小包料金拾貳錢

十九世紀最大の哲學者シヨ氏が一生の大作は彼れが死後滿五十年の紀念として發刊せられたり、譯者は姉崎博士、大哲の名文は博士が流暢の口語に譯せられ、剔抉の論、痛罵の言、美術の發揚、寂靜の福音とは本書に據りて始めて味ふ事を得べし。

根本佛教

(地圖術語解
釋索引付き)

全一册菊判
四七七頁

正價金壹圓四拾錢
小包料金拾貳錢

花つみ日記

全一册四六列上製紙函入五百五十頁
口繪コロタイプ版六枚寫眞版卅六枚

正價金壹圓參拾錢
小包料金拾貳錢

停雲集

全一册四六列上製紙函入五百七十頁
口繪寫眞版四十餘枚挿入

正價金壹圓參拾錢
小包料金拾貳錢

三教統一論

發行所
博文館

全一册菊判美本
紙數二百二十八頁

正價金四拾錢

郵税金六錢

內容細目！

(精神本來の面目)

- 精神の定義○社會の精神○個人の精神
- 生前の精神○死後の精神○精神の分解
- 精神と智情意○智情意と知感慾望心術
- 言行○知感慾望心術言行の相互關係○知
- 感の結合○知感の結合と慾望○慾望と心
- 術言行○心術言行と知感○諸感の調和○
- 諸感調和の要素○同要素道德

(道德思想の基礎)

- 倫理の定義○倫理の八大別○倫理の二大目○倫理の一大綱○倫理と天然則○倫理と人常法○倫理と正邪善惡○正邪善惡と道德○道德の定義○道德と倫理○道德の四面觀○道德の一貫○道德の兩極○倫理道德と孔佛基三教

(孔佛基三教の統一)

- 孔佛基三教の鼎立と精神○孔教と仁愛
- 佛教と禪定○基督教と信仰○孔佛基三教の統一と精神

(九)

文藝學博士 三島中洲君
河野宇三郎君著

博文館發行 帝國百科全書中 哲學書類目錄

● 社會學	文學士 十時 彌君著	● 處世哲學	文學士 杉谷泰山君著
● 論理學	文學士 高山林次郎君著	● 佛教哲學汎論	文學士 石原即聞君著
● 東洋論理學史	文學士 香村宜圓君著	● 儒教哲學概論	文學士 蛭川龍夫君著
● 倫理學	文學士 蟹江義丸君譯	● 世界宗教制度論	法學士 工藤重義君著
● 西洋倫理學史	文學博士 井上哲次郎君閱 文科卒業 木村鷹太郎君著	● 比較宗教學	法學士 南條文雄君著
● 日本倫理史	文學士 有馬祐政君著	● 比較神話學	文學士 高木敏雄君著
● 社會倫理學	文學士 德谷豐之助君著	● 世界宗教史	文學士 加藤玄智君譯
● 佛教倫理學	文學士 蛭川龍夫君著	● 日本佛教史	文學士 石原即聞君著
● 心理學	文學士 速水 澁君著	● 日本儒學史	文學士 久保天隨君著

● 兒童心理學	文學士 松本孝次郎君著	● 近世儒學史	文學士 久保天隨君著
● 近世心理學	文學士 德谷豐之助君著	● 基督教史	文學士 藤谷深勵君著
● 社會心理學	文學士 小林 郁君著	● 宗教進化論	文學士 融 道 玄君著
● 西洋哲學史	文學士 蟹江義丸君著	● 認識論	文學士 淀野耀淳君著
● 近西洋哲學史	文學士 岡島 誘君著	● 進化論	文學士 十時 彌君編
● 哲學汎論	文學士 藤井健次郎君譯	● 社會進化論	文學士 小山東助君著
● 支那哲學史	文學士 中内義一君著		
● 純正哲學	文學士 井上圓了君著		
● 宗教哲學	文學士 姉崎正治君著		

此外弊館には、哲學、倫理、心理、宗教及び參考雜書種々有之候間御註文被成下度尙圖書目錄御入用の方は往復葉書にて御申込被下候へば直ちに送呈可仕候

各冊洋裝菊判美本 並製各正價金 四拾錢 郵税金八錢
紙數各三百頁以上 小包料八錢
製本並特製の二種 特製(表裝洋布)各册金五拾五錢

其日庵叢書

發行所
博文館

(111)

杉山茂丸君著

全一册菊判上製
紙數三百七十頁

正價

金九拾五錢

小包料金八錢

本書は當代の怪傑其日庵主杉山茂丸先生の筆に成れるもの、由來先生政治家に非ずして文藻に富み、禪僧に非ずして禪理を談ず、殊に先生の文を行る尙其の辯の如く、機鋒縱横に閃出して聲咳直ちに章を成し、其の奔放にして自在なる恰も天馬の空を駆るに似たり、

本編收むる處、義太夫論。刀劔譚。借金譚
法憚の説。辛捧録

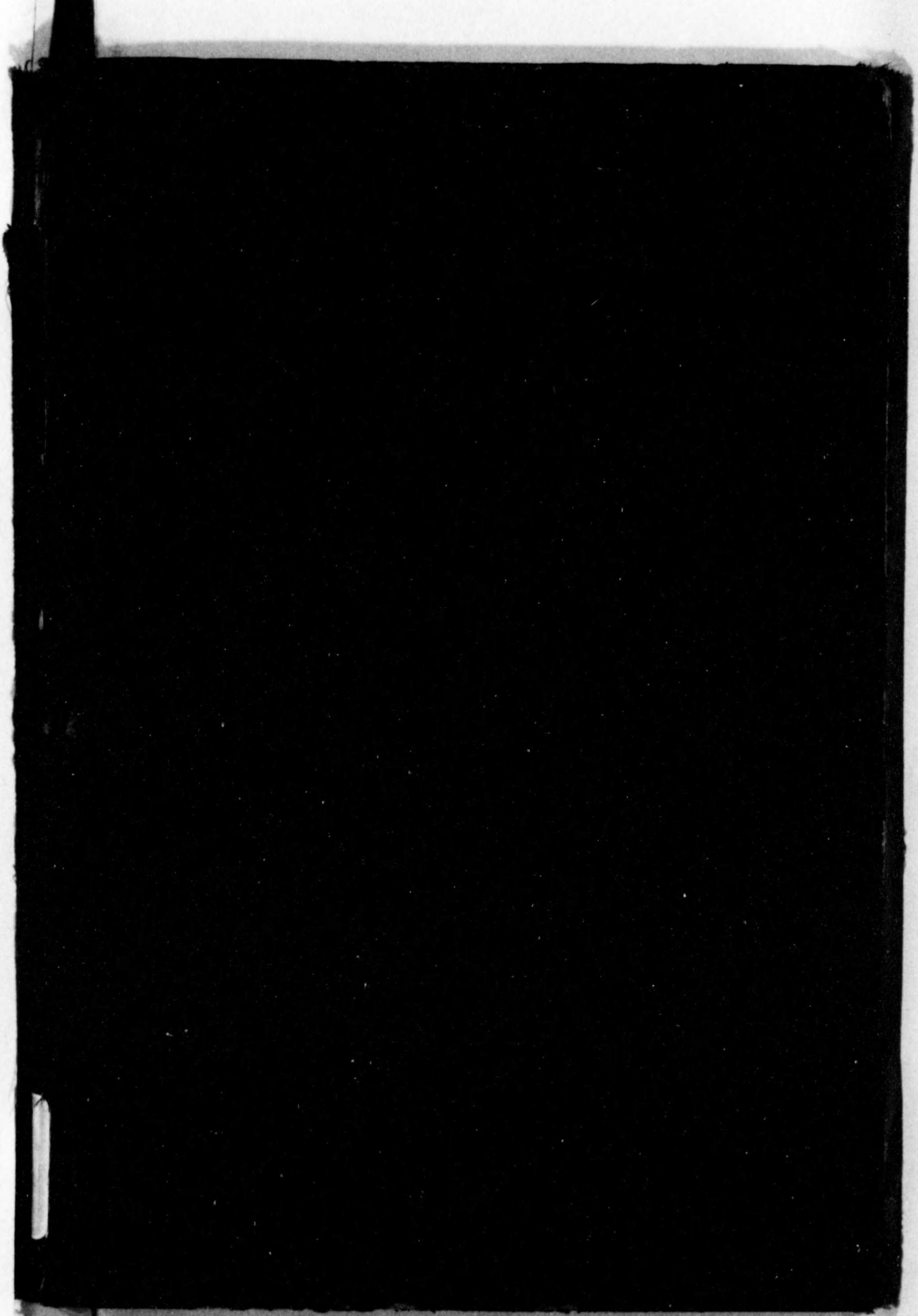
等凡て五章、皆是れ當世得易からざる大文字にして、着想の警拔なる、結構の雄大なる、宛として先生の面目を活躍す、此書一度出て、洛陽の紙價爲めに貴からんとは豈出版者一流の自負のみならんや、敢て一本を江湖讀書家の座右に薦む。

327
587



47

327
187



007920-000-2

327-587

人生の最後

佐伯 剛平/著

M44

AAA-0091



